

保存処置作業完了報告展 1095日の軌跡

4月1日～19日にかけて、九州国立博物館で「山本作兵衛コレクション」の保存処置作業完了報告展が行われ、期間中約5,600人が訪れました。



▲コロタイプ印刷の複製画を熱心に鑑賞する姿が見られました



▲保存処置作業の工程をパネルなどで詳しく説明

平成23年5月に国内で初めてユネスコ世界記憶遺産に登録された山本作兵衛翁の炭坑記録画と記録文書など。本市では、平成24年度から、市石炭・歴史博物館が所蔵する記録画585点と日記や雑記帳などの原資料42点について、劣化などを防ぐための保存処置作業を行ってきました。作業は、627点すべての原資料を1点ずつ丁寧に調査することから始まりました。その調査により、それぞれの状態に合わせた処置方法で修復が行われていきました。

産登録後、本市が所蔵する作兵衛翁の原資料が市石炭・歴史博物館以外で初めて展示されました。報告展では、炭坑内で働く人の姿などを描いた墨画や水彩画の原画、作兵衛翁が漢字を覚えるために綴った実物の帳面などの原資料19点に加えて、再現性の高いコロタイプ印刷といわれる手法で製作した複製画などが展示され、訪れた人は興味深そうに鑑賞していました。

関連イベント in 九国博

コロタイプ印刷手刷り体験

4月5日、作兵衛翁の複製画製作に使用されたコロタイプ印刷の手刷り体験イベントが行われ、約70人が参加しました。このイベントは、報告展で展示された複製画を見た後でコロタイプ印刷の製法を体験し、より関心をもってもらおうと実施されたもの。参加者は、実際に使用されているコロタイプ印刷の版やインキなどを使用して鳥獣戯画の一場面を手刷りしました。

体験した参加者からは「とても楽しい」や「おもしろい」などといった声が聞かれ、楽しんでいる様子でした。



▲自分で手刷りした作品に大喜ぶ子どもたち

記念講演会

4月18日に行われた記念講演会で、**栗原祐司**さん（独立行政法人国立文化財機構本部事務局局長兼東京国立博物館総務部長）が「世界記憶遺産登録の意義」について講演し、引き続き、**大林賢太郎**さん（京都造形芸術大学教授）が保存処置作業について報告しました。また、講演後には保存処置に加わった専門家によるシンポジウムも開かれました。

大林さんは講演の中で「これからが始まりである。今後も修復処置などそれぞれの資料に対応した処置を行えるように研究していく必要がある」と話しました。



▲専門家の意見に耳を傾ける参加者